

丹邊總次郎 (有限会社文林堂本店の創業者)

「少年時代熊本目貫の洗馬の橋を渡つて向ふ角の文林堂といふ大きな文房具店で熊次は時折筆を買つた。」(徳富蘆花 小説「富士」より)

文林堂・丹邊家の先祖は丹後国田辺(現京都府舞鶴市)の出身で、細川家の御用染物師として藩の転封と共に小倉に至り、細川忠利公の代に熊本に来住しました。熊本城そばの坪井川端の船場に細川家より土地を下賜され、川の水を利用し染物を代々家業としていました。明治3年、法令により名字を持つこととなり、丹後の「丹」と田辺の「辺」をとり丹邊の姓を名乗りました。

明治10年2月、西南戦争の熊本城戦で家屋が焼失、洗馬橋西詰(現洗馬橋電停)に移り、染物業を縮小して家紋に因み「桐屋」という旅館を始めました。また同じ頃に宿泊客の要望で筆・硯・紙・墨の“文房四宝”を扱い始め、同年11月3日、熊本来住八代目の丹邊總次郎により「文林堂」が創業されました。初代總次郎は第一回の熊本市議会議員に選出され、また熊本商法会議所(現熊本商工会議



移転前・昭和初期の文林堂



初代・丹邊總次郎

所)の設立に参加するなど、西南戦争後の熊本の復興に尽力しました。染物業は明治末期まで続いていたようです。

昭和3年、二代目丹邊總次郎(禎吉)により「合名会社文林堂」が設立されました。翌昭和4年、市電上熊本線の開通による立ち退きに伴い現在地に移転、新しい店舗は当時ではモダンなギャンブレ



二代目・丹邊總次郎(禎吉)



三代目・丹邊恭平

ル屋根(駒形切妻屋根)を持つ洋式の建物でした。二代目總次郎は書画を趣味とし、また肥後考古学会の初代会長を務め、熊本の考古学にその足跡を残しています。戦中戦後の混乱期を経て昭和34年、三代目の丹邊恭平(号:臨川)により現在の「有限会社文林堂本店」が設立されました。恭平は故海老原喜之助画伯の呼びかけによるアマチュア絵画連盟の設立に参加し、その会長を務め、また自らも文林堂美術研究所を設立し、水墨画教室「臨川会」を主宰するなど、熊本の芸術文化活動に数多く携わりました。昭和59年には熊本で開催された第二回国民文化祭で美術展の実行委員長に就任し、平成2年には熊本県芸術功労者として顕彰されています。

平成10年、恭平の死去により長女の丹邊孝子が代表取締役役に就任しました。

現在の社屋は南側が昭和59年に、北側は平成10年に完成しました。北側の建物は新築ながら以前の建物の雰囲気を残したことが評価され、平成11年度くまもと景観賞「さわやか街かど賞」を受賞しています。創業以来文具、画材、額縁など取り扱いを拡げていきましたが、この北側の建て替えを機に文具の取り扱いを縮小し、現在では書画材・額縁・表装・画廊・絵画教室など、美術に関する専門店として営業しています。おかげさまで平成19年には「文林堂」創業130周年を迎え、平成21年には「有限会社文林堂本店」創立50周年を迎えることが出来ました。



ギャンブレル屋根の旧店舗



現在の店舗